

329 第三百二十九話 日本の肚は決まっていたのか？

盧溝橋事件以後の日支関係にかかる我が国の国策・戦略等を時系列的に並べて、それらを俯瞰してみるともどかしい想いに駆られる。疑問もあり、それらを記すこととする。

(日支関係資料集 <https://worldjpn.net/documents/indices/JPCH/index.html> 等)

1 閲覧等資料の概要

期間：S12年7月(1937/7)～S20年6月(1945/6)

資料件数 22件

内容 大本営政府連絡会議や御前会議等決定事項々、政府(及び総理)声明、閣議決定、関係大臣会議(五相(首、外、陸、海、蔵)、四相、三大臣等)

資料名 戦争指導大綱、対支処理根本方針・帝国国策要綱・要領、対重慶屈服工作等々

2 素朴なる疑問の数々

(1) 戦間期 8年余終始支那事変処理を追求するも結局解決し得ず。軍が主導したとは云え、政戦略の一致努力は窺える。軍の独走とばかりは言えない。

(2) 対支紛(戦)争の目的について

暴支膺懲→重慶政権の屈服→援蒋行為の断絶へと変化した。または、大東亜新秩序建設、親日化、日満支融和等も挙げられよう。日本は支那をどうしたかったのかがどうも見えない。

(3) 戦争目的達成のための方策

一撃和平、政策変更の強要、居留民保護、戦略爆撃、大軍事作戦、親日政権の樹立、和平工作、等様々に方策を追求した。尚、日本が領土的野心はないことは明白だ。

戦争目的を軍事行動によっても和平工作によっても達成し得ないことが明らかになっても、終戦に至るまで新たな決断は出来なかった。

(4) 抽象的な目的達成のための軍事作戦は妥当なのか？

具体的かつ達成可能な目的(目標)を付与すべきだし、支那派遣軍の役割が政戦両略統合とは軍事と政治の関係が逆転している。

(5) 支那問題の肝は何だったのか？

日本が様々な(多国間)和平交渉で絶対に譲れないとしていたのは満州国の承認であつたと思える。だったらやりようはあつた筈では？

(6) 参考 陸軍参謀本部作戦課中佐参謀の回想

「支那事変の解決は、武力をもって重慶或いは成都まで席卷するか、支那本土から撤退するか二通りしかない。」と。統帥部としては、当時の官民の大陸権益の確保切望世論は軍の力を持ってしても覆せないと判断していたようだ。



(7) 武力席卷至難にも拘らず、労効相償わない軍事作戦を継続したのは愚行だ。

(8) 日本の対支(中国)戦争観はどうだったのか？

日本の力をもってすれば、日本の望むように簡単に出来る筈だと信じていた。可笑しい可笑しいと思いつつも結局蒋介石政権や中国国民に対する侮り意識は消えなかったのではないか。

(9) 結局、日本は対支紛(戦)争の明確な目的を確立していなかったのだ。従って、如何なる戦争指導(対支処理)をすべきかの肚が定まっていなかった。

* 日米戦のように力対力の戦いは理解しやすいが、日支紛(戦)争のような次元の違う戦いのありように関する日本の認識・理解は低すぎた。

* 我が国が直面するかもしれぬ将来戦は、多分に小生の理解を超える戦いになる可能性がある。我が国はそれに対応し得るのだろうか。聊か心もとないと思えるのだが…

(了)